

学校教育における吃音矯正の導入 ——楽石社の社会事業と東京の吃音学級との関わり

橋本雄太

(立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

1. はじめに

吃音者は流暢に発話することができないにも関わらず、日本の学校¹⁾は吃音者に対し流暢に話すことを求める。さらに、学校では吃音者が流暢に発話できるように矯正することがある。では日本の学校は、どのような経緯で吃音者の発話を矯正する指導を行うようになったのだろうか。日本の学校における吃音矯正のはじまりについて言語障害教育を専門とする松村・牧野(2004)は以下のように述べている。

我が国の言語障害教育は、明治期における、伊沢修二の楽石社での実践にその萌芽を見る。楽石社の実践は吃音の治療指導を中心に発展し、大正期には、分社、支部、出張所を開設するに至っている。この楽石社の実践は、明治・大正期において、民間事業としての業績を残している。

(松村・牧野 2004: 141)

この指摘からは、彼らが楽石社の吃音矯正事業を日本の言語障害教育の発端と考えていることがわかる。しかし、言語障害教育の歴史について述べた綾部(2017)は以下のように指摘する。

わが国の、初期の言語治療施設は、明治36年に伊澤(ママ)修二が東京市小石川区に設けた吃音者のための落(ママ)石社である。そこで多勢の吃音者の矯正を行ったとされているが、社会事業の枠を越えることなく、学校教育につながることもなく、後の公教育としての言語障害児教育の進展に影響を与えることはなかった。

(綾部 2017: 272)

この綾部(2017)の指摘は、日本の言語障害教育の発端を論じるにあたっての定説になっている。なぜなら、文

部省は「伊沢関係の事業はあくまでも社会事業とみなされ学校教育との接点がなく、学校内での言語障害教育の進展に影響を与えることもなかった。」(文部省 1978:475)と戦前の言語障害教育について言及しているからである。したがって先行研究には、学校における吃音矯正もしくは言語障害教育の発端を、楽石社の吃音矯正事業であるか否かという相違があると理解できる。松村・牧野(2004)と綾部(2017)では、楽石社の事業の位置付けが異なる。松村・牧野(2004)は楽石社の事業を治療もしくは指導であるとし、学校における吃音児への言語指導と類似する教育機関としての機能を有していたことを示唆するが、綾部(2017)は、それは社会事業にとどまるものであり、楽石社には教育機関としての機能がなかったとする。では、なぜこの相違が生じたのだろうか。本論文ではそれを戦前の言語障害教育の発端についての論争に起因すると仮定している。そこで松村・牧野(2004)らによって言語障害教育の萌芽とする楽石社の事業と戦前の言語障害教育のはじまりとされる東京の吃音学級に焦点をあてた議論を行う。

本論文の目的は、戦前の学校教育と吃音矯正との関係を理解するのにあたり、楽石社の吃音矯正事業と東京の吃音学級という二者の関係性を考察することである。研究方法は楽石社や吃音学級に関する文献や新聞記事の資料を用いた分析や考察となる。吃音学級に関する資料は戦災や小学校の統合や廃校によって乏しい状況であり、詳細な内実を知ることは困難であるため、まずは新聞や文献に基づく議論が必要であると考えられる。

次節では、まず楽石社の社会事業について述べ、その後、楽石社の社会事業の展開と東京における吃音学級について論じる。

2. 楽石社のはじまり

楽石社とは伊沢修二(1851-1917)²⁾が日本で最初に組織的に吃音矯正を展開した団体である。明治初期は、吃音は不治の疾患と見なされており「当時、吃音は薬物療

法、電気療法、精神療法などの方法で治療が試みられていたが、これといった決定的な治療法がなかった。」とされる（呉 2016：304）。この吃音の原因を悪癖とし、視話法を用いることにより吃音を矯正することを可能とした人物が、伊沢である。視話法について伊沢は以下のように説明している。

先づ視話法とは如何なるものであるかと云ふに、視話法と云ふは読んで字の如く、人の口より発する音を耳で聴くことの代わりに目で視るのである。

（伊沢 1978: 769）³⁾

このように視話法とは、音を目で視えるかたちに置き換えて発話をする方法である。伊沢はアメリカ留学時に視話法によって自らの英語の発音を矯正した経験があった。伊沢は吃音を悪癖、方言による訛りの一種のような発音であると考え、この経験に基づいて吃音を矯正しようと試み、その実践の場として楽石社を創設したのである。

楽石社は1903（明治36）年に東京の小石川（現在の東京都文教区）という地域で、伊沢が公的教育から身を退いた後に設立された（伊藤 1974）。小石川は、政財界人や文化人などが暮らしていた文教地区であった。また東京高等師範学校（現在の筑波大学）もあり、東京高等師範学校で校長を務めたことがある伊沢にとっては馴染みの深い地域であったともいえる。「楽石社規約」にはその様子が以下のように述べられている。

楽石社は余の老余の事業として営まんとする各種の実験を為す所なり。之を楽石社と称する所以は余久しく小石川に住せるにより礫川の礫字に因みて別号を楽石と称する故その社名にも之を冠したるなり。

楽石社に各科の研究部を置く見込みなり。漸次成立に至るに随て之を発表す可けれども今は唯言語研究部の事のみを掲ぐ。

（信濃教育会編 1978：763）

ここから楽石社は、ひとまず言語に関する研究実験をする目的で設立された機関であったと考えられ、伊藤（1976）や渡辺（2004）らの先行研究でも同様の指摘がなされている。楽石社に設置されていた研究部は以下の通りである。

楽石社言語研究部

一、此部は於ては音韻学及び言語学を研究し其学理を応用せんが為め先づ左の諸項を実行す。

- 一、視話法を伝授す。
- 二、正しき日本語音を伝習す。
- 三、正しき英語音を伝習す。
- 四、正しき清音語音を伝習す。
- 五、正しき台湾語音を伝習す。
- 六、方言を矯正す。
- 七、吃音を矯正す。
- 八、唾子にもものを言はしむ。

（信濃教育会編 1978：763-4）

つまり、楽石社の言語研究部の目的は語学教育や言語矯正であるため、当初の楽石社は語学に関する教育や実験をする教育研究機関として設立されたことが確認できる。ここに松村・牧野（2004）が示唆したような、楽石社の教育研究機関としての役割が見て取れる。その後、楽石社は教育研究機関としての機能を有したまま、語学教育よりも言語矯正の事業に力を入れていくことになる。伊沢の伝記には次のような当時の状況がわかる記述がある。

視話法、英語、支那語等に重きを置き、之が教授に一身機軸をと心掛け其教案迄作成されたのである。然るに事は意外に出でて、いざ生徒募集となりて集り来つた者は十二三歳の少年より十七八歳の青年……五十歳の老人も交つて僅に七名、皆吃音の矯正を希望する者のみで、他の科目に対する志願者は、皆無と云う有様であつた。

（故伊沢修二記念事業会編纂委員会編

[1919] 1988：248）

先に見た楽石社の研究部が掲げてきた目的は語学教育に重きを置いた内容だったが、実際に人員を募集したところ吃音者しか集まらなかったのである。そして、楽石社の視話法を用いた吃音矯正は、一時的とはいえ吃音矯正に効果があったそうである。渡辺によると伊沢の吃音矯正の方法は、ディストラクション効果と呼ばれるものであり、通常とは異なった発話をすることで、一時的に吃音症状がなくなるというアプローチである。ただし、現在の吃音研究においては、その効果によって一時的に吃音症状がなくなったとしても、吃音が治ったことにはならず、治療方法であるとはみなされていない（渡辺 2004:

30)。とはいえ、楽石社の吃音矯正の業績は以下のようなものであった。

本社吃音矯正開始は、今を遡る実に七年有余の昔、明治三十六年三月二十六日にして、爾来今日に至るまで一日片時も社中に（ハヘホ）の声に絶えたる事なく連綿継続して、入社矯正受けたる者、既に満二千名（本年四月五日現在調査）に及びたり。此間明治三十九年九月九日東京高等師範学校内茗溪会に、学者教育課等数十名を招待し、矯吃人員満一千名の記念報告会を開きたる事ありしが、今は早や満二千名の報告をなすべき時期とはなれり。

（信濃教育会編 1978：847）

ここからは教育研究機関としての楽石社が、7年余りで吃音者 2000 名を矯正しており、学者や教育関係者向けに吃音矯正の業績を披露したことがわかる。しかし、呉（2016）や綾部（2017）らの先行研究では楽石社の吃音矯正事業を社会事業として位置づけており、楽石社自体も教育機関として位置づけられていない。この要因は、その後の楽石社の発展過程と関係していると考えられる。次節ではこの点について考察する。

3. 楽石社の発展と学校教育

当初、小石川にある伊沢の自宅で開設された楽石社だが、吃音矯正事業で成功したことによって、校舎を新築し、全国に支部を設けるまでに発展した。呉（2016）はこの展開について、戦前の日本における唯一の確立された吃音の治療方法であり、日本全国のみならず植民地にも及び、講演会や講習会、通信治療に至るまで幅広い事業展開がされたと述べている。綾部（2017）が楽石社を社会事業として位置づけるのは、楽石社が吃音矯正事業で発展し、その後は民間事業として戦後も続いたからだと考えられる。楽石社が幅広い吃音矯正事業を展開していたと考えられる 1923（大正 12）年頃の『楽石社要覧』⁴⁾は楽石社の沿革を以下のように説明する。

本社の創立は明治三十六年三月二十六日にして其起源は故貴族院議員伊沢修二先生明治八年官名を帯びた米国留学中ボストン府に於てアレキサンダーグラームベル博士に就き視話法を学びたるに濫觴したるものにして爾来拮据苦心多年音韻生理、心理教育等諸学の原理を綜合運用して幾多の研究実験を積

み遂に世界に誇るに足る科学的吃音矯正方を発明したるものなり

爾来茲に二十年余年本社は故伊沢先生発明の科学的吃音矯正方法に依り幾多世の不幸なる吃音者を矯正すると共に斯道の普及拡張を期し今日に至る迄本社に収容矯正したるもの社会各階級に渉り其数実に一万余名に達し不幸なる吃音者は今や言語上に復活して再生の歡喜を以て或は學業に或は業務に従事し既に博士、学士、技師、軍人、官吏、会社員として国家社会に貢献しつつあるもの数千名の多きに達せり

（『楽石社要覧』2-3）

楽石社の吃音矯正事業は社会的階級が高いとされていた人々にも認知されている。この背景として楽石社が文教地区に本社を置いていたことや伊沢自身の教育界における功績や貴族院議員としての経歴も関わっていると考えられる。これらは楽石社が社会から認められ、高く信頼され、吃音矯正事業が発展する要因に充分になり得ただろう。『楽石社要覧』では楽石社の実績について、以下のように述べられている。

- A、前社長故伊沢修二先生は吃音者救済の功に依り明治四十四年五月特に勲三等に叙し旭日中綬章を賜はり更に大正六年五月勲二等旭日重光章を賜はれり
- B、畏くも、宮内省より前後四回御下贈金拝受の光栄に浴せり
- C、内務大臣は本社吃音矯正事業の効果確実なる事を前後十四回助成金を下付し此事業を表彰せられたり
- D、文部省は本社吃音矯正法奨励普及の爲め全国中等学校教員吃音矯正法夏季講習会を開催し本事業を天下に紹介せられたり
- E、東京府は第八回助成金を下付して本社の事業を表彰せられたり
- F、東京市は連年十一回補助金下付本社吃音矯正事業を奨励せられたり
- G、文部、内務の大臣次官地方局長普通学校局長及び地方長官其他貴顕紳士には親しく、本社に來臨吃音矯正事業を視察調査の上賞賛を賜へり

（『楽石社要覧』3-4）

このとおり楽石社の吃音矯正を中心とした事業は、当時

の内務省や文部省からの援助が受けられるまでに急速に発展をした。これは文部省と楽石社との関係が構築され、より社会的な認知度と信用度を高めていったことを示唆している。その後、さらなる展開として、文部省が楽石社に要請し、中学校に在籍している吃音者の全国調査の実施や吃音矯正教師を養成することになる。さらに、吃音を矯正するだけでなく、吃音矯正法を普及させるために学校教員に向けて講習などを開催していた。

そこで、まずは伊沢から協力を得て文部省が全国規模で実施した、当時の中学校における吃音者に関する調査について確認する。この成果は、『楽石業誌』⁵⁾ という雑誌に統計表が掲載されている。伊沢修二はこの調査のことを次のように以下のように述べる。

例へば吃音者の数の如き、凡そ我が国にどれだけあるか、更に見当も付かなかつた。そこで先生は吃音検定方法を定め、文部省普通学校局長に稟請し、中学程度の学校生徒中の、吃音者の員数を調査し、吃音生徒の統計表を作ることが出来た。其調査によると、中学程度の在学生徒で検査を受けた者十三万四千四百八十八人で、其中に三千人の吃音者がある、即ち百人につき二人二分八厘で、一万に対して二百二十八人の割合となる。女子の方は割合に少く、調査を受けし者、二万四十九人に対して僅に百十八名で、百分の五分九厘である。

(故伊沢修二記念事業会編纂委員会編
[1919] 1988 : 277)

今日において吃音者は100人に1人の割合で存在し、男性が多く、女性は少ないといわれている。当時の吃音検定方法の検査方法は不明だが、吃音者の数は100人に2人いたとされており、女性の方が少ないという点では、今日の吃音者の割合と近い。この調査は日本で初めて吃音者を対象とした社会調査でもある。現在の日本においては吃音者を対象とした全国調査は皆無であるため、この文部省による調査は非常に意義が大きいといえる。

次に、吃音矯正をするだけでなく人材育成もしていた楽石社の、吃音矯正教師の養成について見ておきたい。呉は「文部大臣の訪問を機に東京市の小学校訓導で吃音矯正教師となる星野理三、加藤晋、清水鑑三、村上求馬の四人に免許状が授与された。」(呉2016:311)と述べている。さらに楽石社の学校への講習は東京以外でも実施されていた。『楽石業誌』に以下のような記事がある。

吃音矯正教師免許状授与

松澤本社副社長は大正三年十月池上大阪市長の招聘に依り、大阪市小学校教員吃音矯正法講習会講師として大阪市に出張南区渥美小学校内に於て約二週間講習、池上市長及び宮島教育課長其他市教育当路社の熱心なる斡旋尽力と講習生諸氏の最も真面目なる努力励精とに依り頗る好成绩を収めたる事ありしが、其結果伊澤本社長より吃音矯正免許状したるもの左の如し。

(『楽石業誌』34:41)

楽石社による吃音矯正教師の養成は東京以外でも実施されていたのである。この吃音矯正教師免許状授与に関しては、当時の官報⁶⁾にも交付されていたとする事実が記載されている。このような楽石社の事業について、文部省の以下のような証言にも注意を払わなければならない。

伊沢関係の事業はあくまでも社会事業とみなされ学校教育との接点がなく、学校内での言語障害教育の進展に影響を与えることもなかった。

(文部省1978:475)

これまで述べたことを総合して考えられるのは次のことである。楽石社は吃音者調査や吃音矯正教師の養成をしていたことから、文部省を介して学校と接点があったことは確かだといえる。だが、設立当初の楽石社は教育研究機関を目指して設立されたものの、社会的認知度が高い吃音矯正事業が発展していく過程で、文部省(1978)や綾部(2017)が指摘したような社会事業とみなされてしまったのである。しかし、楽石社は吃音矯正のための人材育成もしており、実質的一種の教員養成機関もしくは教育機関としての機能も有していたことを重視すべきであると考えられる。

4. 吃音学級

戦前の言語障害教育を担っていた東京の吃音学級についての先行研究では、開設年や設置された小学校など断片的な内容しか明らかにされていない。そこで本節では当時の吃音学級に関する新聞記事などの資料を用い、その内実について述べていく。まず先に戦前における東京の吃音学級についての、文部省(1978)や松村・牧野(2004)の説明を確認する。

東京市では、大正期の後半から、市当局が率先し、特殊教育施設の開設を手がけてきた。大正十五年には、牛込区の鶴巻尋常小学校に虚弱児の養護学級が新設されたが、深川区の八名川尋常小学校には、吃音学級が開かれた。当時の概念として、吃、訥のほかは発音不能とか失語症といったものしかなかったのである。

八名川尋常小学校の吃音学級は、後に元加賀小学校に移されたという。また、芝、神田の二つの小学校にもこの種の学級が設けられたという。

昭和九年の東京市の異常児調査によると、吃語児は二、〇八八人で出現率は〇・三〇%に当たる。また、吃語児の学級数は三で、在籍児は一〇〇人とされている。

また昭和十一年二月、文部省は師範学校、中等学校、高等学校、実業学校、青年学校の生徒三二九万七、七六〇人について吃語者数の調査をし、男子〇・七%、女子、〇・〇五%の出現率を得ている。

このように、戦前の言語障害教育は、全く細々と、一部で行われていたにすぎず、その内実も伝わっていない。

(文部省 1978 : 171-172)

学校教育では、大正期、東京市の小学校に吃音学級が開設されている。大正 15 年に東京市深川区の八名川尋常小学校、芝、神田の 2 つの学校に吃音学級が開設されたとの記録が見られるが、これらの実践は、太平洋戦争を境に、ひとまず終結をみることになる。

(松村・牧野 2004 : 141)

上記のような吃音学級が開設された経緯については以下の新聞記事で確認できる。

東京市小学校における特殊教育は従来優良、低脳および貧困児童三種の補助学級が置かれたのみであったが、この四月以来どもり児童のために吃音学級を、虚弱児のために養護学級を試験的に設けることになり・・・略・・・例えば小石川楽石社と連絡をとって小学校教員にどもり矯正法を伝授させたり、又近々市統計課と協力して貧困児童の不就学および中途退学児の大調査に着手したり又芝赤羽小学校にも一養護学校を新設するなど□次この方面の充実に計るといふから、優れた子も哀れな子もすべて

幸福に恵まれることになる□である。

(朝日新聞、1926 年 5 月 26 日、東京朝刊) 7)

戦前の吃音学級は東京市で試験的に設置された。八幡によると戦前の特殊学級の制度は 1941 の国民学校令施行令規則第 73 条により制度化された (八幡 2004:129)。そのため吃音学級は特殊教育が制度化される前である 1920 (大正 9) 年に東京市によって実験校として始まったと推察することができる。また、この記事で一例として挙げられた東京市補助学級は、特別支援教育の制度面での基盤形成において主要な役割を果たしたとも指摘されている (八幡 2004 : 129)。こうした状況から、戦前の吃音学級は特殊学級が制度化されるより前に、東京市によって言語障害教育の基礎を形成することを目的として設けられたと考えられる。同時に着目すべき点は、吃音学級を試験的に設置するために楽石社が吃音学級の教員養成を担い、矯正法は視話法を用いた吃音矯正法を伝授していたことである。文部省で開催された「養護学級に関する懇談会」に関する資料からは吃音学級の状況をさらに知ることができる。

東京市では先生のはう〈ママ〉の元加賀校だけです。他に季節的に区教育会の主催で吃音児童を集めて特別に矯正指導をやりますが、一時的なもので永続的なものは御校だけです。東京市の教育としましても、日本の吃音指導にしましても甚だ遺憾なことだとおもひます。もう少しどうにかならないものでせうか。

(三宅編 (1943) : 36)

1943 (昭和 18) 年の段階で吃音学級は、元加賀校 1 校のみにしか設置されておらず、それ以外は開設された学級は閉鎖されたのである。この理由について、「養護学級に関する懇談会」に関する資料では以下のように述べられている。

私達が愛宕校に行ってみましたときは、後任の小林先生が非常に熱心にやつてをられるのですが、惜しいことにお亡くなりになりました。その後愛宕の校長さんも後任を探されたいのですが、ご承知のやうに東京市は本正といふ資格が必要で、そのうへ吃音の指導者でなければいけないわけなので、半年探してなくて、市の体育課に行かれたら「こちらでも探すから」といふわけで半年探されましたが、結

局なくで一年後には自然消滅になつてしまつたのです。

(三宅編 (1943) : 36)

さらに川本 (1954) による次の指摘もある。

本社が先達となって、吃音矯正等の公立学校や学級が発達する方向にむかって努力することが足りなかった。

(川本 [1954] 1981 : 61)

吃音学級は楽石社が先達となり、吃音矯正法を学校で普及する方向に向かって活動していた。しかし、吃音矯正を施すことができる資格を持ち、なおかつ吃音矯正を指導できる人材不足により吃音学級が閉鎖に追い込まれたことから、人材の育成が困難であったことも推論することができる。こうしたことが、川本の努力が足りなかったという証言にも表われていると考えられる。結果として、戦前に全ての吃音学級は閉鎖された。その背景として、文部省は公的教育である学校を重視したことに関わる事情が推察できる。学校の教員制度と吃音学級の指導とを両立する制度の形成には至らなかった点、そして学校制度上、楽石社のような私塾が公的な教育機関の代わりにはなれなかった点が要因としてあるのではないだろうか。

しかし一方で、当時の学校における吃音児の児童観について、次の楽石社の痕跡を看取できる。吃音学級の教員は新聞記事で以下のように述べている。

どもりは十中の九までが幼少時代の人真似から起こるもので、始めは面白半分に真似たのが、知らず知らず習慣になった言語上の悪癖です。

そして一旦どもる癖がつき自分のどもりを自覚すると言語に対して恐怖心が日増しに募りどもりは段々重くなるのが通例です。同時に性質も段々いぢけ学校の成績も悪くなり遂にはそれを苦にして自殺者も生じる所以です。

然しどもりは決して病気ではなく一種の悪癖ですから、どんなに重いどもりでも矯正方法の宜しきを得たら、きつと全治しますからご安心の上成るべくお早く矯正に御着手下さい。自宅療法と申しても、どもりは薬や器械では決してなをりません。これは私の体験上はつきり申し上げます。

(朝日新聞、1934年3月19日、東京朝刊)

先に述べた文部省の調査によっても吃音の原因は悪癖とされていた。以下の新聞記事には以下のように説明されている。

文部省にては今回中等諸学校に於ける吃音生徒に就き調査したるに左の結果を得たり吃音は病氣と云ふよりも寧ろ悪癖と見るべきもの多き事 発音曖昧にしてカ行タ行の如き密閉子音に至り□発音不明瞭になる事

(読売新聞、1908年9月05日、東京朝刊)

まず当時の吃音学級の教員が吃音の原因を悪癖としていたことから、楽石社が吃音の原因を悪癖として信じて吃音矯正を施し、学校教育に取り組んでいた影響があったと考えられる。当時の学校教育では楽石社の吃音論が信じられており、戦前の東京での吃音学級もしくは言語障害教育において、その仕組みや実践が中心的な役割を果たしたのである。

戦前の言語障害教育もしくは吃音学級の吃音矯正法と楽石社の吃音矯正法とは非常に類似点がある。だが、当時は吃音学級だけが吃音児の吃音矯正をしていたわけではなく、むしろ永続的に吃音を矯正できる学級を維持できなかった。これには、楽石社は幼稚部を設けており、吃音児の矯正をしていたことも関わってくる可能性も指摘できる。つまり、吃音学級が発展すると楽石社の吃音矯正事業と競合してしまうため、楽石社は吃音学級に傾注しなかったという可能性も考えられるのである。

東京の吃音学級は言語障害教育の基礎を形成するために試験的に設けられ、そこで楽石社は吃音学級の教員養成と指導方法に中心的な役割を果たしたと考えられる。一方で文部省は、特殊学級が制度化される前であったため吃音学級を公的教育の一部であると位置づけることができなかった可能性がある。試験的に設けられた吃音学級は担当教員の後継者不足や楽石社が吃音学級の発展に力を注がなかったという複合的な原因で、戦前に全て閉鎖されたのである。

5. おわりに

本論文では資料を考察した結果、第一に、楽石社は教育研究機関と社会事業という両方の機能を有していたことが明らかになった。松村・牧野 (2004) と綾部 (2017) という先行研究で、楽石社の事業の位置付けが異なるのは、楽石社が教育研究機関と社会事業という両方の機能

を有しており、どちらか片方に論点を置いて議論していたためだと考えられる。

吃音学級は東京市によって試験的に設けられたため、公的教育機関の一部として設けられたが、公的教育とは認められたかどうかは定かではない。そのため、先行研究では楽石社の吃音矯正事業と繋がっている吃音学級を言語障害教育とは位置づけられなかったのだろう。この一因として、戦前の吃音学級に関する先行研究が断片的であり、吃音学級と楽石社との関わりが見えづらかったことであると指摘することができる。なぜなら本論文では、楽石社は教育研究機関として、戦前の吃音学級もしくは言語障害教育に必要な有資格者を輩出する役割を持っており、楽石社で養成された吃音矯正教師により、楽石社と同じ視話法を用いた吃音矯正を学教教育の中で実践していたことが明らかになったからである。楽石社は、多くの吃音者の吃音矯正に成功し、世間では吃音矯正をする社会事業であると認知されていたことも、教育機関としての楽石社が後退した理由であろう。

楽石社が吃音学級の運営に関わったことにより、学校教育に吃音が矯正できるという価値観や方法が導入された。これには言語障害教育の萌芽をみることができる。しかし、吃音学級は言語障害教育の基礎を形成できなかった。日本における言語障害教育の本格的な始まりは戦後からであると言われており、戦前の吃音学級は言語障害教育の一部であると位置づけられていない。

したがって、今後の研究課題は楽石社が関わりつつも全て閉鎖された戦前の吃音学級と、戦後の言語障害教育の継続性と断絶性を解明することである。

謝辞

本論文の資料の一部は伊那市創造館から提供されたものである。調査にあたっては伊那市創造館の皆さまには大変なご協力をしていただき、感謝申し上げます。

注

- 1) 本論文における学校とは小学校や中学校、高等学校のことを指す。
- 2) 伊沢修二は、日本における吃音の歴史研究において最初に取り上げられる人物である。伊沢は明治時代の近代教育における学校教育の形成に携わった。その後は日本で初めて組織的に吃音矯正を実践し、吃音矯正機関である楽石社を設立した(橋本2018)。
- 3) 文語体はカタカナ表記からひらがな表記に変更し、ひらがな表記に統一している。また、旧字体は新字体表記に変更している。
- 4) 『楽石社要覧』とは楽石社が発刊した楽石社の概要を紹介する冊

子である。発行年は不明であるが、1923(大正12)年頃の資料だと推察される。

- 5) 『楽石業誌』は楽石社の事例研究などを掲載するための雑誌である(文部省 1978:170)。
- 6) 官報1912年10月21日と1917年9月12日に楽石社から吃音矯正教師の免許が授与されたとする記載がある。
- 7) □は不明瞭な字であったため□と表記した。

文献

- 綾部泰雄, 2017, 「わが国の言語障害児教育のあゆみと日本言語障害児教育研究会, 日本言語障害児教育研究会編『基礎からわかる言語障害児教育』271-290, 学苑社.
- 橋本雄太, 2018, 「伊沢修二の教育と吃音矯正」『Core Ethics』14: 201-210.
- 伊沢修二, 1909, 「吃音矯正と教育」『帝国教育』327: 45-60.
- 伊藤伸二, 1974, 「吃音問題の歴史——楽石社と言友会をめぐって」『大阪教育大学紀要第IV部門教育科学』23(4):131-6.
- 川本宇之介, [1954] 1981, 『総説特殊教育』湘南出版社.
- 菊池良和, 2012, 『エビデンスに基づいた吃音支援入門』学苑社.
- 故伊沢修二記念事業会編集委員編, [1919] 1988, 『楽石伊沢修二先生』大空社.
- 松村勘山・牧野泰美, 2004, 「我が国における言語障害教育を取り巻く諸問題——変遷と展望」『国立特殊教育総合研究所紀要』31: 141-152.
- 三宅鑛一編, 1943, 「養護学級に関する懇談会(上)」『帝国学校衛生』23(3): 34-50.
- 文部省, 1978, 『特殊教育百年史』東洋館出版社.
- 日本学校衛生会, 1942, 「養護学級に関する懇談会(上)」『学校衛生』22: 34-50.
- 奥中康人, 2008, 『国家と音楽——伊沢修二がめざした日本近代』春秋社.
- 信濃教育会編, 1978, 『伊沢修二選集』信濃教育会.
- 氏平明, 1999, 「日本の言語障害治療の現状について」『社会言語学』2(1): 70-81.
- 渡辺克典, 2004, 「吃音矯正の歴史社会学——明治期・大正期における伊沢修二の言語矯正をめぐって」『年報社会学論集』17: 25-35.
- 八幡ゆかり, 2008, 「知的障害教育の変遷過程にみられる特殊学級の存在意義——教育行政施策と実践との比較検討をとおして」『鳴門教育大学研究紀要』23: 128-41.

Japanese Institute for Stuttering and its Influence to School Education in Pre-WW2 Japan

Yuta HASHIMOTO

The First Japanese institute for stuttering, Rakuseki-sha, was established by Isawa Shuji in 1903. However, Japan's speech and language disorder education is generally believed to have begun only after WW2 because some regard Rakuseki-sha activity as just a social project and not related to school education. This study aims to reveal the influence of Rakuseki-sha on school education before WW2. The result finds that Rakuseki-sha provided qualified teachers and methods of stuttering correction necessary for stuttering classes, thus contributing to realize speech correction in public schools even before WW2.

Keywords : Stuttering, Rakuseki-sha, Isawa Shuji, Speech, Language Disorder